



青少年の喫煙について（第一報）： 教育大学学生における喫煙の実態

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横田, 正義 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003762

青少年の喫煙について
(第一報) 教育大学学生における喫煙の実態

横 田 正 義

北海道教育大学旭川分校保健学教室

Smoking Among the Younger Generation
(Report 1) – Smoking among Teacher College Students –

Masayoshi YOKOTA

Department of Health Sciences, Asahikawa College, Hokkaido University of Education
Asahikawa 070

Abstract

A questionnaire survey was administered to determine the situation regarding smoking among students at the Teacher College (405 male, 408 female) in Asahikawa from October to November 1988.

The results may be summarized as follows:

- 1) 28.0% of the students smoke, 51.6% males and 4.7% females.
- 2) The first time most students smoked was due to curiosity, under the influence of friends, or without specified reasons. They did it alone or with friends at their own or friends' homes while in junior high school or high school.
- 3) The students were well aware of the connection between smoking and health, lung cancer, passive smoking, the underweight babies, nicotin addiction, and the effects on the respiratory system. The effects on the digestive and circulatory system were less known.
- 4) Many male students in the smoking group thought that females shouldn't smoke.
- 5) Most students in a smoking group will possibly keep smoking even when they become teachers.

I 緒 言

喫煙の健康に対する弊害が解明されるにつれて、喫煙対策は公衆衛生活動の最も重要な課題の一

つとなっている。

わが国成人の喫煙率は、男性は1966年の83.7%を最高に漸減の傾向にあり、1986年には62.5%に低下し、年齢段階別にみても漸減の傾向にある。女性は、男性と同様に1966年の18.0%を最高に、1986年には12.6%にまで低下したが、年齢段階別では、50歳代以降の喫煙率が著しく低下しているのに比べて、20歳代は逆にかなり増加している。¹⁾

未成年者の喫煙率に関しては、これまでのところ全国規模での無作為抽出調査は行われていない。しかし、一部の地域で実施された中学生を対象(946名、男子490名、女子456名)とした小川ら²⁾の調査によると、今までに一度でも喫煙したことのある喫煙経験者率は、男子37.3%、女子12.7%であり、高学年ほど高率であった。同様に高校生を対象(7,214名、男子4,779名、女子2,435名)とした野津³⁾の調査では、時々あるいは常習喫煙者率は、男子40.1%、女子7.1%であり、3年生男子では51.4%、女子13.8%にも上昇することが報告されている。これらのことから、未成年者の多くは、中、高校生の時に喫煙を経験しており、成人喫煙者の多くは十代のうちに喫煙習慣が形成されていることが推測される。

喫煙の健康に対する弊害の多くは、喫煙開始年齢が早いほどその危険度が高まり、同時に喫煙習慣は容易に形成されるが断つのが極めて難しく、さらに成人喫煙者の多くは十代のうちに喫煙習慣が形成されていることを考えあわせると、学校教育における喫煙対策とりわけ喫煙予防・禁煙教育は学校保健の分野にとって最も重要な課題である。^{4,5)}

そこで著者は、将来学校教育の場で喫煙予防・禁煙教育を推進する際に大きな役割を担うであろう教育大学学生を対象に喫煙状況の実態と喫煙に対する意識・背景を調査したところ若干の知見を得たので報告する。

II 調査方法

昭和63年10、11月に旭川市内のA教育大学に在籍する学生1,242名(男656名、女586名)を対象に「タバコに関するアンケート」と題して無記名自記式質問紙法で調査した。回収数は1,031(83.0%)であったが、記入不備の218を除外したので有効回答数は813(65.5%、男子405名、女子408名)であった。

調査内容は、喫煙・禁煙状況、初回喫煙状況、喫煙・禁煙の動機・理由、喫煙に対する意識・態度、喫煙の弊害の知識など16項目である。

III 結 果

1. 喫煙者率

全体の喫煙者率は28.0%(228名)であり、男女別では男子51.6%(209名)、女子4.7%(19名)で喫煙者の91.7%は男子であった。同様に禁煙者率は3.7%(30名)であり、男子5.9%(24名)、女子1.5%(6名)であった(表1)。

表1 喫煙者率

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
喫煙者	209(51.6)	19(4.7)	228(28.0)
非喫煙者	172(42.5)	383(93.9)	555(68.3)
禁煙者	24(5.9)	6(1.5)	30(3.7)
合計	405(100.0)	408(100.0)	813(100.0)

2. 初回喫煙開始時期

喫煙群・禁煙群の初回喫煙開始時期は、「小学生のとき」25名(9.7%)、「中学生のとき」95名(36.8%)、「高校生のとき」92名(35.7%)であり、高校卒業時までには82.2%の者が喫煙を開始していた。男女別では、男子は「小学生のとき」21名(9.0%)、「中学生のとき」90名(38.6%)、「高校生のとき」86名(36.9%)であり、高校卒業時までには197名(84.5%)の者が、女子は「小学生のとき」4名(16.0%)、「中学生のとき」5名(20.0%)、「高校生のとき」6名(24.0%)であり、高校卒業時までには15名(60.0%)の者がそれぞれ喫煙を開始していた(表2)。すなわち、喫煙群・禁煙群の大多数の学生は高校卒業時までには喫煙を開始しており、「中学生のとき」は男子の方が女子より高率であり、男女の間に有意差($P < 0.05$)が認められたことから、男子の方が女子より早くから喫煙を開始したといえる。

表2 初回喫煙開始時期

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
小学生のとき	21(9.0)	4(16.0)	25(9.7)
中学生のとき	90(38.6)	5(20.0)	95(36.8)
高校生のとき	86(36.9)	6(24.0)	92(35.7)
高校卒業以降	36(15.5)	10(40.0)	46(17.8)
合計	233(100.0)	25(100.0)	258(100.0)

3. 初回喫煙動機

喫煙群・禁煙群の初回喫煙動機で高い回答率を示した項目は、男子は「好奇心」27.9%、「なんとなく」23.2%、「友人の勧め」21.0%、女子は「友人の勧め」24.0%、「好奇心」16.0%、「なんとなく」16.0%であり、男女とも同様の傾向を示した。さらに各項目とも男女の間に有意差が認められなかったことから、「好奇心」、「なんとなく」、「友人の勧め」の3項目が初回喫煙の3大動機と考えられる(表3)。

4. 初回喫煙場所と人数

喫煙群・禁煙群の初回喫煙場所は、「自宅」45.3%、「友人宅」21.3%、「飲食店」7.0%の順であり、各項目とも男女の間に有意差は認められなかった。「その他」の場所では、川辺、旅館、キャンプなどの解放的な場所での喫煙が目立った(表4)。

喫煙群・禁煙群の初回喫煙人数は、「自分1人」46.5%、「2～5人」48.1%であり、各項目とも男女の間に有意差は認められなかった(表5)。

表3 初回喫煙動機

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
友人の勧め	49(21.0)	6(34.0)	55(21.3)
先輩の勧め	14(6.0)	1(4.0)	15(5.8)
親の勧め	5(2.1)	0(0.0)	5(1.9)
その他の人の勧め	2(0.9)	1(4.0)	3(1.2)
カッコイイ	5(2.1)	0(0.0)	5(1.9)
香りがよい	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
好奇心	65(27.9)	4(16.0)	69(26.7)
友人が吸っていた	14(6.0)	3(12.0)	17(6.6)
大人の仲間入り	1(0.4)	1(4.0)	2(0.8)
気持ちよらし	21(9.0)	3(12.0)	24(9.3)
やせようと思って	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
なんとなく	54(23.2)	4(16.0)	58(22.5)
その他	3(1.3)	2(8.0)	5(1.9)
合計	233(100.0)	25(100.0)	258(100.0)

表4 初回喫煙場所

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
自宅	104(44.6)	13(52.0)	117(45.3)
友人宅	47(20.2)	8(32.0)	55(21.3)
先輩宅	2(0.9)	1(4.0)	3(1.2)
学校	7(3.0)	0(0.0)	7(2.7)
飲食店	17(7.3)	1(4.0)	18(7.0)
ゲームセンター	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
公園	10(4.3)	0(0.0)	10(3.9)
路上	14(6.0)	1(4.0)	15(5.8)
その他	32(13.7)	1(4.0)	33(12.8)
合計	233(100.0)	25(100.0)	258(100.0)

表5 初回喫煙人数

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
自分1人	110(47.2)	10(40.0)	120(46.5)
2~5人	109(46.8)	15(60.0)	124(48.1)
大勢	14(6.0)	0(0.0)	14(5.4)
合計	233(100.0)	25(100.0)	258(100.0)

5. 1日の喫煙本数

喫煙群の1日の喫煙本数は、「11～20本」53.1%が最も高率を示し、「10本以下」31.1%、「21本以上」15.8%であった。男女別では、男子は「11～20本」56.5%、女子は「10本以下」78.9%がそれぞれ最も高率であり、「21本以上」は男子16.7%、女子5.3%であった（表6）。

表6 1日の喫煙本数

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
10 本 以 下	56(26.8)	15(78.9)	71(31.1)
11 ～ 20 本	118(56.5)	3(15.8)	121(53.1)
21 本 以 上	35(16.7)	1(5.3)	36(15.8)
合 計	209(100.0)	19(100.0)	228(100.0)

6. 喫煙群の禁煙経験の有無と喫煙理由

喫煙群の禁煙経験に関しては「ある」57.9%で、男女別では56.9%、女子68.4%であり、「ない」42.1%であった（表7）。

喫煙群の喫煙理由で高率を示した項目は、「習慣になって止められない」42.5%、「落ち着くから」31.6%、「気分転換」30.3%、「おいしいから」25.9%であり、男女とも同様の傾向を示した。さらに各項目とも男女の間に有意差は認められなかったことから、喫煙理由として「習慣になって止められない」、「おいしいから」の「習慣性」と「落ち着くから」、「気分転換」の「心理的要因」の2つが考えられる（表8）。

これらの結果から、喫煙群の多くの学生は過去に一度は禁煙を試みたが、喫煙がもたらす「習慣性」と「心理的要因」すなわち精神的依存性が形成され完全には禁煙に至っていないといえる。

表7 喫煙群の禁煙経験の有無

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
あ る	119(56.9)	13(68.4)	132(57.9)
な い	90(43.1)	6(31.6)	96(42.1)
合 計	209(100.0)	19(100.0)	228(100.0)

7. 喫煙群の禁煙意欲と禁煙群の禁煙理由

喫煙群の禁煙意欲は「禁煙したい」32.0%で、男女別では男子31.1%、女子42.1%であり、「禁煙したいと思わない」38.2%、「どちらでもない」29.8%であった。「禁煙したい」と回答した男女の間に有意差は認められなかった（表9）。

喫煙群の禁煙意欲の理由としては、「健康に悪いから」が男女とも最も高率を示し、男子は「経済的負担」9.2%、女子は「他人からよく注意を受ける」25.0%の順であった（表10）。

禁煙群の禁煙理由は、喫煙群の禁煙意欲の理由と同様に男女とも「健康に悪いから」が最も高率

表 8 喫煙群の喫煙理由 (複数回答)

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
習慣になって止めれない	91(43.5)	6(31.6)	97(42.5)
おいしいから	56(26.8)	3(15.8)	59(25.9)
かっこいいから	1(0.5)	1(5.3)	2(0.9)
暇つぶし	43(20.6)	2(10.5)	45(19.7)
落ち着くから	63(30.1)	9(47.4)	72(31.6)
気分転換	62(29.7)	7(36.8)	69(30.3)
つきあいで	2(1.0)	0(0.0)	2(0.9)
今さらやめても遅いから	4(1.9)	1(5.3)	5(2.2)
やせるため	2(1.0)	0(0.0)	2(0.9)
特に理由はない	33(15.8)	4(21.1)	37(16.2)
その他の	5(2.4)	0(0.0)	5(2.2)

であり、つぎに男子は「経済的負担」25.0%，女子は「他人からよく注意を受ける」16.7%であった(表11)。

これらの結果から、喫煙群の禁煙意欲の理由と禁煙群の禁煙理由は、両群とも「健康に悪いから」など健康への悪影響が挙げられるが、男子は「経済的負担」、女子は「他人からよく注意を受ける」も深く関連していたといえる。

表 9 喫煙群の禁煙意欲

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
禁煙したい	65(31.1)	8(42.1)	73(32.0)
禁煙したいと思わない	82(39.2)	5(26.3)	87(38.2)
どちらでもない	62(29.7)	6(31.6)	68(29.8)
合計	209(100.0)	19(100.0)	228(100.0)

表10 喫煙群の禁煙意欲の理由

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
病気をしたから	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
体の不調を感じて	1(1.5)	0(0.0)	1(1.4)
健康に悪いから	46(70.8)	6(75.0)	52(71.2)
他人によく注意を受ける	2(3.1)	2(25.0)	4(5.5)
経済的に負担がかかる	6(9.2)	0(0.0)	6(8.2)
他人に迷惑がかかる	1(1.5)	0(0.0)	1(1.4)
スポーツにさしさわる	2(3.1)	0(0.0)	2(2.7)
まずい	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
ばからしい	1(1.5)	0(0.0)	1(1.4)
なんとなく	2(3.1)	0(0.0)	2(2.7)
その他の	4(6.2)	0(0.0)	4(5.5)
合計	65(100.0)	8(100.0)	73(100.0)

表11 禁煙群の禁煙理由

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
病気をしたから	1(4.2)	0(0.0)	1(3.3)
体の不調を感じて	2(8.3)	0(0.0)	2(6.7)
健康に悪いから	11(45.8)	4(66.7)	15(50.0)
他人によく注意を受ける	0(0.0)	1(16.7)	1(3.3)
経済的に負担がかかる	6(25.0)	0(0.0)	6(20.0)
他人に迷惑がかかる	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
スポーツにさしきわる	1(4.2)	0(0.0)	1(3.3)
まずい	1(4.2)	0(0.0)	1(3.3)
ばからしい	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
なんとなく	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
その他	2(8.3)	1(16.7)	3(10.0)
合計	24(100.0)	6(100.0)	30(100.0)

8. 非喫煙群の喫煙意識

非喫煙群の喫煙意識に関しては「喫煙したいと思った時がある」36.8% (204名) で、男子36.0%、女子37.1%であり、男女の間には有意差は認められなかった(表12)。さらに「喫煙したいと思った時がある」と回答した204名のその理由は「好奇心」43.1%、「なんとなく」26.0%、「気晴らし」15.7%の順であり、各項目とも男女の間に有意差は認められなかった(表13)。この結果は、さきに述べた喫煙群・禁煙群の初回喫煙動機と同様の傾向を示した。

表12 非喫煙群の喫煙意欲

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
喫煙したいと思った時がある	62(36.0)	142(37.1)	204(36.8)
喫煙したいと思った時はない	110(64.0)	241(62.9)	351(63.2)
合計	172(100.0)	383(100.0)	555(100.0)

表13 非喫煙群の喫煙したい理由

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
かっこいい	6(9.7)	4(2.8)	10(4.9)
香りがよい	1(1.6)	1(0.7)	2(1.0)
好奇心	24(38.7)	64(45.1)	88(43.1)
友人が吸っていた	3(4.8)	7(4.9)	10(4.9)
大人の仲間入り	1(1.6)	0(0.0)	1(0.5)
気晴らし	10(16.1)	22(15.5)	32(15.7)
やせようと思って	0(0.0)	1(0.7)	1(0.5)
なんとなく	14(22.6)	39(27.5)	53(26.0)
その他	3(4.8)	4(2.8)	7(3.4)
合計	62(100.0)	142(100.0)	204(100.0)

「喫煙したいと思った時がない」と回答した351名のその理由は、「健康に悪いから」29.6%、「なんとなく」23.1%、「その他（大嫌い、絶対喫煙したくないなど）」15.4%、「煙が眼にしみる・臭い」12.5%の順であり、喫煙の健康への悪影響と喫煙に対する不快感が主な理由と考えられる（表14）。

表14 非喫煙群の喫煙したくない理由

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
健康に悪いから	38(34.5)	66(27.4)	104(29.6)
経済的に負担がかかる	12(10.9)	0(0.0)	12(3.4)
他人に迷惑がかかる	0(0.0)	1(0.4)	1(0.3)
スポーツにさしきわる	7(6.4)	3(1.2)	10(2.8)
まずい	7(6.4)	12(5.0)	19(5.4)
ばからしい	11(10.0)	15(6.2)	26(7.4)
煙が眼にしみる・臭い	8(7.3)	36(14.9)	44(12.5)
なんとなく	18(16.4)	63(26.1)	81(23.1)
その他	9(8.2)	45(18.7)	54(15.4)
合計	110(100.0)	241(100.0)	351(100.0)

9. 喫煙の弊害の知識

全対象者の喫煙の弊害に関する知識は（複数回答）、「肺癌」94.5%、「受動喫煙」79.6%、「胎児への影響」77.1%、「ニコチン中毒」72.0%、「呼吸器系の疾患」67.8%が高い回答率を示した。「胃癌」25.7%、「食道癌」22.9%、「消化器系の疾患」18.5%および喫煙によって著しい影響を受ける「循環器系の疾患」37.5%の回答率は低く、肺癌よりも発癌率の高い「喉頭・咽頭癌」46.5%も比較的低率であり、これらの結果は、喫煙群、非喫煙群、禁煙群でも同様の傾向を示した。

表15 喫煙の弊害の知識（複数回答）

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
肺 癌	371(91.6)	397(97.3)	768(94.5)
胃 癌	125(30.9)	84(20.6)	209(25.7)
食 道 癌	105(25.9)	81(19.9)	186(22.9)
喉 頭 ・ 咽 頭 癌	190(46.9)	188(46.1)	378(46.5)
呼 吸 器 系 の 疾 患	272(67.2)	279(68.4)	551(67.8)
循 環 器 系 の 疾 患	157(38.8)	148(36.3)	305(37.5)
消 化 器 系 の 疾 患	85(21.0)	65(15.9)	150(18.5)
胎 児 へ の 影 響	279(68.9)	348(85.3)	627(77.1)
ニ コ チ ン 中 毒	279(68.9)	306(75.0)	585(72.0)
肌 の お と ろ え	130(32.1)	245(60.0)	375(46.1)
指 の 汚 れ や 口 臭 ・ 臭 い	218(53.8)	261(64.0)	479(58.9)
衣 服 ・ 部 屋 の 汚 れ	237(58.5)	276(67.6)	513(63.1)
受 動 喫 煙	306(75.6)	341(83.6)	647(79.6)
害 は 特 に な い	10(2.5)	1(0.2)	11(1.4)
そ の 他	13(3.2)	4(1.0)	17(2.1)

男女別では、女子の方が男子より各項目とも高い回答率を示す傾向にあり、特に「肺癌」(P<0.001)、「胎児への影響」(P<0.001)、「ニコチン中毒」(P<0.001)、「受動喫煙」(P<0.01)、「肌のおとろえ」(P<0.001)、「指の汚れや口臭・臭い」(P<0.01)、「衣服・部屋の汚れ」(P<0.01)でそれぞれ男女の間に有意差が認められた(表15)。

10. 喫煙の弊害の知識に関する情報源

全対象者の喫煙の弊害の知識に関する情報源は(複数回答)、「テレビ・ラジオ」82.7%が最も高率を示し、「新聞」60.6%、「書物」47.6%、「学校・先生」45.5%の順であった。この結果は喫煙群、非喫煙群、禁煙群および男女別でも同様の傾向を示しており、「書物」(P<0.05)、「学校・先生」(P<0.001)において、男女の間に有意差が認められた(表16)。

表16 喫煙の弊害の知識に関する情報源(複数回答)

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
テレビ・ラジオ	341(84.2)	331(81.1)	672(82.7)
新聞	246(60.7)	247(60.5)	439(60.6)
書物	178(44.0)	209(51.2)	387(47.6)
医師・看護婦	52(12.8)	39(9.6)	91(11.2)
友人・先輩	96(23.7)	81(19.9)	177(21.8)
家の人	78(19.3)	75(18.4)	153(18.8)
学校・先生	131(32.3)	239(58.6)	370(45.5)
講義	26(6.4)	31(7.6)	57(7.0)
その他	21(5.2)	7(1.7)	28(3.4)

11. 他人の喫煙について

全対象者の他人の喫煙についての回答率は(複数回答)、「誰が喫煙してもかまわない」33.0%、「未成年者は喫煙すべきでない」27.3%、「女子は喫煙すべきでない」33.6%、「全員喫煙すべきでない」13.8%、「医師は喫煙すべきでない」7.0%、「教師は喫煙すべきでない」5.2%、「その他」5.3%であった。比較的高率を示した項目は、「女子は喫煙すべきでない」、「誰が喫煙してもかまわない」、「未成年者は喫煙すべきでない」であり、「その他」では、「他人に迷惑をかけなければよい」、「時と場所をわきまえばよい」などマナーをわきまえた上での喫煙は本人の自由とする回答が多数をしめた。

男女別では、男子は「女子は喫煙すべきでない」43.7%、「誰が喫煙してもかまわない」35.8%、「未成年者は喫煙すべきでない」23.5%、「全員喫煙すべきでない」7.9%で、女子は「未成年者は喫煙すべきでない」31.1%、「誰が喫煙してもかまわない」30.1%、「女子は喫煙すべきでない」23.5%、「全員喫煙すべきでない」19.6%であり、男女の間に違いが認められた。男女の間で有意差が認められた項目は、「女子は喫煙すべきでない」(P<0.001)、「未成年者は喫煙すべきでない」(P<0.01)、「全員喫煙すべきでない」(P<0.001)であり、特に男子の約半数は「女子は喫煙すべきでない」と回答したことから、男子は女子の喫煙に対して否定的に考えていたといえる(表17-1)。

表17-1 他人の喫煙について (男女別, 複数回答)

	男 N (%)	女 N (%)	男女 N (%)
誰が喫煙してもかまわない	145 (35.8)	123 (30.1)	268 (33.0)
全員喫煙すべきでない	32 (7.9)	80 (19.6)	112 (13.8)
女子は喫煙すべきでない	177 (43.7)	96 (23.5)	273 (33.6)
未成年者は喫煙すべきでない	95 (23.5)	127 (31.1)	222 (27.3)
教師は喫煙すべきでない	20 (4.9)	22 (5.4)	42 (5.2)
医師は喫煙すべきでない	25 (6.2)	32 (7.8)	57 (7.0)
そ の 他	13 (3.2)	30 (7.4)	43 (5.3)

喫煙群, 非喫煙群別では, 喫煙群は「女子は喫煙すべきでない」46.1%, 「誰が喫煙してもかまわない」39.5%, 「未成年者は喫煙すべきでない」22.4%であり, 非喫煙群は「未成年者は喫煙すべきでない」30.3%, 「誰が喫煙してもかまわない」29.9%, 「女子は喫煙すべきでない」28.1%, 「全員喫煙すべきでない」18.6%であった。両群の間で有意差が認められた項目は, 「誰が喫煙してもかまわない」($P < 0.05$), 「女子は喫煙すべきでない」($P < 0.001$), 「全員喫煙すべきでない」($P < 0.001$), 「未成年者は喫煙すべきでない」($P < 0.05$), 「教師は喫煙すべきでない」($P < 0.05$)であった。喫煙群は「誰が喫煙してもかまわない」, 「女子は喫煙すべきでない」が非喫煙群より高率であり, 「全員喫煙すべきでない」は, その大半が非喫煙群による回答であることが特徴的であった(表17-2)。そこで喫煙群の大多数は男子であったので, 男子において喫煙群と非喫煙群の間で検討したところ, 男子の両群で有意差が認められた項目は, 「全員喫煙すべきでない」($P < 0.001$), 「女子は喫煙すべきでない」($P < 0.01$), 「教師は喫煙すべきでない」($P < 0.05$)であった。特に男子の喫煙群の約半数は, 「女子は喫煙すべきでない」を回答しており, 非喫煙群の男子との間に有意差が認められたことから, 両群の男子を比較すると喫煙群の男子は, 自己の喫煙は肯定するが, 女子の喫煙は否定する傾向にあったといえる。同様に女子における喫煙群と非喫煙群の間では, 「誰が喫煙してもかまわない」($P < 0.01$), 「全員喫煙すべきでない」($P < 0.01$), 「女子は喫煙すべきでない」($P < 0.001$)の項目に有意差が認められ, 「全員喫煙すべきでない」, 「女子は喫煙すべきでない」, 「未成年者は喫煙すべきでない」の回答率は, 非喫煙群の方が高率を示したことから, 両群の女子を比較すると非喫煙群の女子は, 喫煙そのものを否定する傾向にあったといえる(表17-3)。

表17-2 他人の喫煙について (喫煙, 非喫煙, 禁煙群別, 複数回答)

	喫煙群 N (%)	非喫煙群 N (%)	禁煙群 N (%)
誰が喫煙してもかまわない	90 (39.5)	166 (29.9)	12 (40.0)
全員喫煙すべきでない	5 (2.2)	103 (18.6)	4 (13.3)
女子は喫煙すべきでない	105 (46.1)	156 (28.1)	12 (40.0)
未成年者は喫煙すべきでない	51 (22.4)	168 (30.3)	3 (10.0)
教師は喫煙すべきでない	7 (3.1)	35 (6.3)	0 (0.0)
医師は喫煙すべきでない	18 (7.9)	39 (7.0)	0 (0.0)
そ の 他	5 (2.2)	37 (6.7)	1 (3.3)

表17-3 他人の喫煙について (男女, 喫煙, 非喫煙, 禁煙群別, 複数回答)

	男			女		
	喫煙群N(%)	非喫煙群N(%)	禁煙群N(%)	喫煙群N(%)	非喫煙群N(%)	禁煙群N(%)
誰が喫煙してもかまわない	78(37.3)	59(34.3)	8(33.3)	12(63.2)	107(27.9)	4(66.7)
全員すべきでない	4(1.9)	25(14.5)	3(12.5)	1(5.3)	78(20.4)	1(16.7)
女子は喫煙すべきでない	104(49.8)	62(36.0)	11(45.8)	1(5.3)	94(24.5)	1(16.7)
未成年者は喫煙すべきでない	48(23.0)	44(25.6)	3(12.5)	3(15.8)	124(32.4)	0(0.0)
教師は喫煙すべきでない	6(2.9)	14(8.1)	0(0.0)	1(5.3)	21(5.5)	0(0.0)
医師は喫煙すべきでない	16(7.7)	9(5.2)	0(0.0)	2(10.5)	30(7.8)	0(0.0)
その他	5(2.4)	7(4.1)	1(4.2)	0(0.0)	30(7.8)	0(0.0)

12. 教師になった時の喫煙行動

全対象者の教師になった時の喫煙行動についての回答率は「喫煙しない」62.6%、「どちらともいえない」12.9%、「喫煙する」11.8%、「児童・生徒の前では喫煙しない」8.4%、「学校では喫煙しない」3.2%の順であり、「喫煙しない」が最も高率を示した。

男女別では、男子は「喫煙しない」40.2%、「喫煙する」23.2%、「どちらともいえない」16.3%、「児童・生徒の前では喫煙しない」15.6%、「学校では喫煙しない」3.2%で、女子は「喫煙しない」84.8%、「どちらともいえない」9.6%、「学校では喫煙しない」3.2%の順であった(表18-1)。

表18-1 教師になった時の喫煙行動 (男女別)

	男 N(%)	女 N(%)	男女 N(%)
喫煙する	94(23.2)	2(0.5)	96(11.8)
喫煙しない	163(40.2)	346(84.8)	509(62.6)
児童・生徒の前では喫煙しない	63(15.6)	5(1.2)	68(8.4)
学校では喫煙しない	13(3.2)	13(3.2)	26(3.2)
どちらともいえない	66(16.3)	39(9.6)	105(12.9)
その他	6(1.5)	3(0.7)	9(1.1)
合計	405(100.0)	408(100.0)	813(100.0)

喫煙群, 非喫煙群別においては, 喫煙群は「喫煙する」41.2%、「児童・生徒の前では喫煙しない」24.6%、「どちらともいえない」19.3%、「学校では喫煙しない」8.8%、「喫煙しない」4.4%で, 非喫煙群は「喫煙しない」88.1%、「どちらともいえない」9.2%であった(表18-2)。喫煙群の大多数は男子であり, 女子の大多数は非喫煙群であったので, 男女別において喫煙群と非喫煙群の間で検討したところ, 男子の喫煙群は「喫煙する」44.0%、「児童・生徒の前では喫煙しない」25.4%、「どちらともいえない」20.1%、「学校では喫煙しない」4.8%、「喫煙しない」3.8%であり, 非喫煙群は「喫煙しない」86.0%、「どちらともいえない」9.3%、「児童・生徒の前では喫煙しない」2.9%であった。女子の喫煙群は「学校では喫煙しない」52.6%、「児童・生徒の前では喫煙しない」15.8%、「喫煙する」, 「喫煙しない」, 「どちらともいえない」がそれぞれ10.5%であり, 非喫煙群は「喫煙しない」89.0%、「どちらともいえない」9.1%であった。

これらの結果から、喫煙群の男女で「喫煙しない」と回答した者は5%ならずであり、喫煙群の学生は教師になっても喫煙を継続することが推測される。非喫煙群の男女は「喫煙しない」が80%を越えており、非喫煙群の大多数の学生は教師になっても喫煙しないといえる。禁煙群で「喫煙しない」と回答した者は男子29.2%、女子50.0%であり、禁煙群の学生は教師になっても禁煙を継続することが難しいといえる(表18-3)。

表18-2 教師になったときの喫煙行動(喫煙, 非喫煙, 禁煙群別)

	喫煙群 N(%)	非喫煙群 N(%)	禁煙群 N(%)
喫煙する	94(41.2)	1(0.2)	1(3.3)
喫煙しない	10(4.4)	489(88.1)	10(33.3)
児童・生徒の前では喫煙しない	56(24.6)	7(1.3)	5(16.7)
学校では喫煙しない	20(8.8)	3(0.5)	3(10.0)
どちらともいえない	44(19.3)	51(9.2)	10(33.3)
その他	4(1.8)	4(0.7)	1(3.3)
合計	228(100.0)	555(100.0)	30(100.0)

表18-3 教師になったときの喫煙行動(男女, 喫煙, 非喫煙, 禁煙群別)

	男			女		
	喫煙群N(%)	非喫煙群N(%)	禁煙群N(%)	喫煙群N(%)	非喫煙群N(%)	禁煙群N(%)
喫煙する	92(44.0)	1(0.6)	1(4.2)	2(10.5)	0(0.0)	0(0.0)
喫煙しない	8(3.8)	148(86.0)	7(29.2)	2(10.5)	341(89.0)	3(50.0)
児童・生徒の前では喫煙しない	53(25.4)	5(2.9)	5(20.8)	3(15.8)	2(0.5)	0(0.0)
学校では喫煙しない	10(4.8)	1(0.6)	2(8.3)	10(52.6)	2(0.5)	1(16.7)
どちらともいえない	42(20.1)	16(9.3)	8(33.3)	2(10.5)	35(9.1)	2(33.3)
その他	4(1.9)	1(0.6)	1(4.2)	0(0.0)	3(0.8)	0(0.0)
合計	209(100.0)	172(100.0)	24(100.0)	19(100.0)	383(100.0)	6(100.0)

IV 考 察

大学生を対象とした喫煙に関する全国規模での無作為抽出調査は行われていないのが現状であるが、1973年に愛知県下4大学を対象とした村松ら⁶⁾の調査によると、全体の喫煙者率は28.4%で、男子52.2%、女子5.7%であった。7年後の1980年、中国・四国地方の4国立大学を対象とした重信ら⁷⁾の調査では、全体の喫煙者率は36.7%であった。1983年に某国立総合大学の教養課程に在籍する学生を対象とした皆川ら⁸⁾の調査結果では、喫煙者率は27.5%で、男子31.9%、女子8.8%であった。本調査の喫煙者率は28.0%で、男子51.6%、女子4.7%であり、上述の大学生を対象とした調査結果と同様の傾向を示した。

初回喫煙開始時期は「小学生のとき」、「中学生のとき」、「高校生のとき」をあわせると82.2%と高率を示した。大学生を対象とした重信らの調査でも同様の結果が得られており、先に述べた中学

生、高校生を対象とした小川ら、野津の調査結果を考えあわせると、喫煙群の大多数の学生は高校卒業時までには喫煙を開始して、十代のうちに喫煙習慣が形成されていたといえる。

初回喫煙状況は「好奇心」、「なんとなく」、「友人の勧め」が3大動機であり、「自宅」か「友人宅」で、「自分1人」あるいは「2～5人」で喫煙したといえる。この結果は、小川ら、野津の調査結果と同様であり、未成年者の初回喫煙状況の一般的な傾向を示していると考えられる。

喫煙群の多数の学生(57.9%)は、過去に一度は禁煙を試みたことから、禁煙への意欲は低いとはいえないが、実際に「禁煙したい」は3人に1人であり、禁煙を繰り返しながらも喫煙を続けることが推測される。

喫煙群の禁煙意欲の理由と禁煙群の禁煙理由は、ともに「健康に悪い」が第一に挙げられたが、男子は「経済的負担」、女子は「他人によく注意を受けるから」も深く関連していたことから、20歳前後の青少年では禁煙しなければならない病気などの差し迫った理由は少なく、たとえ禁煙したとしても状況さえ許せば喫煙を再開することが推測される。

非喫煙群で「喫煙したいと思った時がある」と回答した学生は36.8%であり、男女の間に有意差は認められなかった。その主な理由は男女とも「好奇心」、「なんとなく」、「気晴らし」を挙げており、先に述べた喫煙群、非喫煙群の初回喫煙動機と同様だった。非喫煙群の3人に1人は男女を問わず喫煙したいと思った経験を持つが、なんらかの理由で喫煙行動には至らなかったといえる。

喫煙の弊害の知識については、男女とも喫煙の有無に関わらず比較的高い回答率を示した。なかでも「肺癌」、「呼吸器系の疾患」、「受動喫煙」、「ニコチン中毒」、「胎児への影響」はよく知られていたが、「消化器系の疾患」、「循環器系の疾患」は知られていなかった。

喫煙の弊害の知識に関する情報源は、「テレビ・ラジオ」、「新聞」が高率を示し、「学校・先生」は50%にも達しなかったことから、大多数の学生は、喫煙に関する知識をマスコミから入手していたといえる。A教育大学では、全学生を対象とした健康に関する授業科目は開講されていない現状である。学校での保健教育の推進者がクラス担任である教師も重要な役割を担っている現状を考慮すると、これらの授業科目の開設、充実が強く望まれる。

他人の喫煙に関しては「全員喫煙すべきでない」13.8%、「教師は喫煙すべきでない」5.2%の回答率は極めて低く、「他人に迷惑をかけなければよい」、「時と場所をわきまえばよい」などマナーをわきまえた上での喫煙は、基本的には教師を含めて本人の自由とする傾向にあった。しかし、男子は女子の喫煙に対して否定的であり、特に喫煙群の男子は、非喫煙群の男子より自己の喫煙は肯定するが、女子の喫煙は否定する傾向を示したことが特徴的であった。

教師になった時の喫煙行動について喫煙群の学生は「喫煙しない」が5%不足であり、教師になっても喫煙を継続することが推測される。学校での喫煙予防・禁煙教育は今日的な課題であり、その実践が数多く報告されている^{9)~12)}。教師はこの推進者として大きな役割を担っており、教師の喫煙は、児童・生徒の喫煙行動に様々な影響を与えることは容易に想像されることから、喫煙者から非喫煙者への行動変容を喫煙群の学生に対して期待したい。

V 結 論

学校での喫煙対策に対する保健教育のより一層の充実が指摘されているが、将来、喫煙対策を推進する際に大きな役割を担うであろう教育大学学生を対象として、喫煙状況の実態と喫煙に対する意識・背景を調査したところつぎの知見を得た。

1. 喫煙者率は28.0%で、男子51.6%、女子4.7%であった。
2. 初回喫煙状況の概要は、「中学生・高校生のとき、好奇心・なんとなく・友人の勧めが動機で、自宅・友人宅で、自分1人・2～5人で喫煙した」であった。
3. 喫煙の弊害に関する知識は、肺癌、受動喫煙、胎児への影響、ニコチン中毒および呼吸器系の疾患はよく知られていたが、消化器系の疾患と循環器系の疾患はあまり知られていなかった。
4. 喫煙群の男子は、自分の喫煙は肯定するが女子の喫煙は否定する傾向にあった。
5. 喫煙群の大多数の学生は、教師になっても喫煙を継続し、非喫煙群の学生は喫煙しないことが推測された。

謝 辞

本調査にご協力くださいました学生の皆様ならびに資料の整理にご尽力いただきました高橋美佳子さん、松原詩緒さんに深く感謝いたします。さらに統計処理は、北海道教育大学旭川分校保健学教室、中田秀彦教授の開発されたBSAS SYSTEM (Basic Statistical Analysis System) を使用しました。ここに衷心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 厚生省編：喫煙と健康（喫煙と健康問題に関する報告書）、保健同人社、東京、1988.
- 2) 小川 浩、富永祐民：中学生の喫煙－喫煙状況と関連要因－、日本公衛誌、32(6)、305-314、1985.
- 3) 野津有司：青少年の喫煙に関する調査研究 第1報－高校生の喫煙率及び喫煙状況について－、学校保健研究、26(12)、571-579、1984.
- 4) 伊藤 章：喫煙予防と学校保健、学校保健研究、24(12)、558-561、1982.
- 5) 平山 雄：地域保健と喫煙予防、学校保健研究、24(12)、568-573、1982.
- 6) 村松常司、森田 穰、村松園江、小島淳仁、高橋邦郎、伊藤 章：喫煙の経験、習慣に影響を及ぼす諸要因の研究 第1報 大学生に関する基礎的研究、学校保健研究、17(11)、539-544、1975.
- 7) 重信卓三、中丸澄子、川越和子、斉藤 紀、藏本 淳：大学生の喫煙(1)男子学生の喫煙、広島医学、36(3)、94-100、1983.
- 8) 皆川興栄、知久 忍：大学生の喫煙意識と喫煙行動、新潟大学教育学部紀要、26(2)、425-433、1985.
- 9) 樋口 始：小学校における喫煙防止教育の実際、学校保健研究、27(12)、566-571、1985.
- 10) 川畑徹朗：中学校における喫煙防止教育の実際、学校保健研究、27(12)、572-574、1985.
- 11) 小林賢二：高等学校における喫煙防止教育の実際、学校保健研究、27(12)、575-578、1985.
- 12) 久保田登久乃：禁煙教育の実際、学校保健研究、31(8)、362-367、1989.